

女と男

村田 勝敬

■ プロローグ

以前、「病の起源～癌～」というNHKスペシャル番組が放映された。チンパンジーとヒトの遺伝子配列は99%が同じだという。進化の過程で異なったのは、雌チンパンジーは交尾可能時期になると雄にそれを気付かせる身体変化を発現するが、一方のヒトは狩猟生活などの男女分業化の中で随時精子が作れる細胞分裂能を獲得した点だという。そして、その自律的に細胞分裂を可能にする仕組みはヒトの発癌機序と共通すると説明していた。

話は一変し、最近の若い女性は「優しい男子」を好むという。生まれ育った時代の規範が異なる私にはその言葉の意味がよく判らない。そこで親父面して若い女性に“優しい”の意味を尋ねてみた。「話をじっくり聞いてくれ、しかも私が望むように行動してくれる」ことだそうだ。この定義そのものは所謂“友人”と同等のようにも映り、何故“恋人”なのか、鈍い私には皆目理解できなかつた。

■ 米国産牛肉の是非

2012年11月22日号の『週刊文春』に「輸入牛肉で発癌リスクが5倍になる」、翌週11月29日号には「輸入牛肉で日本の子供が壊れてゆく」という記事があった。我が国のホルモン依存性癌の増加は牛肉消費量の増加と並行しているようであり、実際、最近25年間の乳癌および卵巣癌は各々4倍、8倍に増加し、その理由として米国産牛肉に含まれる高濃度の女性ホルモンが疑われるという内容であった。

記事の原典を辿ると、欧州腫瘍学会が2009年に発行したAnnals of Oncology誌に掲載された「牛肉中エストロゲン濃度とヒトホルモン依存性癌」であった。米国産肉牛の97%が、成長促進のため、17β-エストラジオールなどのステロイドを用いて肥育されているという。そこで、北海道大学の研究者が日本の食品売場で購入した米国産牛肉と国産牛肉を測定すると、前者脂身部分の17β-エストラジオール(E2)およびエストロン(E1)濃度の中央値が、後者と比べて、各々140倍、11倍高かった。また、赤身肉に至ってはE2は600倍以上、E1は10倍高いという結果が示された。一方、初期の子宮体癌や卵巣癌のE2やE1濃度は正常組織に比べて高いことが知られており、

エストロゲンの蓄積がこれらの癌発生に強く関与している可能性は否定できないとのことであった。

内閣府食品安全委員会は、Annals of Oncology誌の論文が恐らく発表される前に、「牛の成長促進を目的として使用されているホルモン剤（肥育ホルモン剤）」に対する見解を提示した。これによると、国際機関のFAO/WHO合同食品添加物専門家会議(JECFA)は天然型ホルモンのE2、プロゲステロン、テストステロン、3種の合成型ホルモンについて、一生涯にわたって摂取し続けても健康への悪影響がないと推定される一日摂取許容量を設定した。我が国では、天然型ホルモンについての残留基準値の設定はないが、合成型ホルモンについては厚生労働省薬事食品衛生審議会で一部残留基準が設定された。しかしながら、欧州共同体は成長促進を目的としてホルモン作用を有する物質を牛に使用すること（すなわち、米国・カナダ産牛肉の輸入）を禁止しており、これらの国々の間で肥育ホルモン剤を巡る紛争（議論）は現在も続いている。



■ 牛乳摂取がもたらす長所短所

実は、食品安全に関わる研究者達はもう一つの難題に直面していた。牛乳や乳製品はカルシウムや蛋白質の摂取源であり、小児期に特に有用な食品と考えられている。2000年代になって市販牛乳中に高濃度のE1やE2を含むことが判明し、これを問題視する研究者が警告を発した。

乳牛（雌牛）は生後14ヶ月になると人工授精で妊娠させられ、約280日で出産する。5日間の初乳は仔牛に授乳するが、その後はヒト用牛乳生産のため約

10ヶ月間搾乳される(出産前約2ヶ月間は搾乳しない)。その搾乳期間中(通常、出産3ヶ月後)に、次の人工授精が行われ、以後これらが繰り返される。このような乳牛は妊娠期間に卵胞ホルモン(エストロゲン)や黄体ホルモン(プロゲステロン)を多量に分泌するため、妊娠中に搾乳された牛乳の中にもこれらホルモンが存在する。

■ 今後検討すべき課題

女性ホルモンの過剰摂取による健康影響は、思春期に到達する前の小児や閉経後の女性に出現しやすいことや、男性の場合は精巣癌や前立腺癌、女性の場合は乳癌や卵巣癌の発生増加と関連することが示唆されている。ヒト体内で産生されるエストロゲンでない外因性エストロゲンの今後の問題点として、①牛乳と米国産牛肉の各々で1日換算のエストロゲン摂取量はどれくらいと推定されるのか(どちらが摂取量として多いのか)、②外因性エストロゲンの1日換算摂取はどれくらいの量から発癌に関与するのか、③特に男性の場合、どの年齢で発癌影響が発現し易いのか、さらに④男子の女性化を促進することはないのか(この場合、何をもちて“女性化”の指標とするか?)、などが挙げられよう。

熊本県水俣市に私の友人が住んでいる。市内にはオーストラリア産牛肉を使用している“す〇家”しかなく、“牛井の△□屋”は近くにないのだそうだ。

米国産牛肉の話をつげると、「東京出張の際には△□屋を探して、牛井を食べるようにするよ」との返答メールが届いた。「最近頭髪が薄くなったので・・・」というのがその理由らしい。一方、東京に住んでいる別の友人は既にネットニュースでこの情報を知っていたが、「米国産牛肉を食べれば更年期障害がひどくならず済む!」と達観していた。

■ エピローグ

最近の日本の若い男子は何となく女々しく、優しい草食系男子などと揶揄されている。この理由は、案外、幼少期より食餌性女性ホルモンに高濃度曝露されてきたせいかもしれぬが、そんな男子は聡明な女性に見透かされ、彼女らの言葉巧みな話術に為す術を知らない。言われるままに、イエスマンに成り下がってしまう…。その上、彼らの多くは教科書や本を読むことを忘れ、恰も彼女の返事を待ち侘びるかの如く携帯電話やスマートフォンの画面ばかり凝視している。この様相は正に狂気の沙汰であり、さもなくば適応障害(ないし鬱病)予備軍か?と言いたくもなる。土佐日記「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」を書いた紀貫之のように、多くの書物を精読し、想像力豊かな逞しい男児になってくれないと祖国日本が沈没してしまう!!

(医学系研究科環境保健学講座 むらたかつゆき)

「秋大生活のひろば」No. 148 (2014年6月刊)



フェロー諸島で肩を寄せ合う独女と日男